難波西鶴と海の道

【16】

「世之介」も2回訪問

天満と変わらぬにぎわいの酒田港

森田　雅也

山形の酒田港は、西鶴が難波でその名を徐々に高めていったのと軌を一にして、繁栄をしていきます。誠に不思議なことです。

『山形縣史　巻二』（大正9）の「靈元天皇天和三(1683)年」の条には、その繁栄ぶりを以下のように記します。「酒田湊へ入津仕候廻船、総て諸国之船出入仕候得共、上方より商売物取分多く参候物、播磨塩、大坂・境・伊勢より木綿類、出雲より鉄、美濃より茶、南部・津軽・秋田より材木、松前より肴、最上より大豆其外雑穀に御座候、并ニ和泉・讃岐・加賀・越前・越後よりも船参申候」

この記述からは、当時の酒田港に、上方からの商人はもちろん、赤穂の塩を運んでくる商人、各地から綿布を運んでくる商人、鉄、茶、材木、鰊、大豆、雑穀などの取引のために全国から商人が集まっていたわけです。

もちろん、一大集積地ですから、のこぎり商い。酒田に落ちた商取引の総額はすごいものだったでしょう。

東北海運史研究の第一人者渡辺信夫氏は、「天和3年の調べによると、酒田入港の船数は春より9月までに2500艘から3000艘であった。月平均315艘から375艘、1日平均10艘から13艘となる。滞在期間が10日間ほどとし、1艘の乗組員が3～4人から16～17人とすると、千人から1500～1600人の商人や船員が港に上陸していたことになる。」（『海からの文化　みちのく海運史』　平成4　河出書房）と、当時の酒田港のにぎわいを分かりやすい数字で示して下さっています。それだけの商人や船員が上陸しているとすれば、宿屋、食事処、日用品店等も相当に繁盛したでしょうから、酒田港のにぎわいは、難波の天満界隈の繁盛風景と変わらなかったでしょう。

天和3年は、『好色一代男』刊行の1年後ですが、西鶴の『好色一代男』の主人公世之介は作品中、2回酒田を訪れたことになっています。

まず、巻三の六「木綿布子もかりの世」では、「北国の山々を過ごし、今男盛二十六の春、坂田という所にはじめてつきぬ。此浦のけしき、桜は浪にうつり、誠に『花の上漕ぐ蜑の釣舟』と読しは此所ぞ」と記しています。世之介26歳のころは「蜑の釣舟」の歌でイメージされる、のどかな漁村であったとします。

もう一度は巻七の五「諸分の日帳」です。世之介は53歳という設定ですので、27年後となります。

『好色一代男』は「歳立て」と言って、全54章を7歳から60歳まで起こった出来事と1章ずつでつづっています。巻七の五はどう描かれているのでしょうか。次週に書きます。

（関西学院大学文学部文学言語学科教授）